

『源氏物語』における「涼」「涼しげなり」について

——恋愛と出家に絡んで——

相 原 映清香

はじめに

前稿で『源氏物語』における「そぞろ寒し」について言及した¹⁾。その際、寒の感覚を表す他の語についても少しばかり触れ、それらが主に恋愛に関して用いられている事情を分析した。今回取り上げる「涼」「涼しげなり」も、恋愛と関わりのある場面で用いられているものもある。が、それだけではなさそうである。全体で二九例ある「涼」「正篇二二例、宇治十帖七例」、および七例ある「涼しげなり」(正篇のみ)について考察し、それらに込められている意味を探りたい。なお、引用は『日本古典文学全集』『源氏物語』一〜六(小学館)により、巻数とページ数を付記した。傍線はすべて筆者による。

一 恋愛との関連

たとえば、源氏は、夏の暑い時期に涼を求めた場所で空蟬に出会う。箒木巻の次の場面を見てみよう。

さうさうしくて、中納言の君、中務などやうのおしなべたらぬ若人どもに、戯れ言などのたまひつつ、暑さに乱れたまへる御ありさまを、見るかひありと思ひきこえたり。大臣も渡りたまひて、かくうちとけたまへれば、御几帳隔てておはしまして、御物語聞こえたまふを、「暑きに」と、にがみたまへば、人々笑ふ。
(箒木・一—一六七頁—一六八頁)

雨夜の品定めの後、源氏は内裏から葵上のいる大殿へ行く。傍線部「暑さに乱れたまへる御ありさま」とは、源氏の様子をさしている。源氏が「乱れ」る人であるのに対して、葵上は「乱れたるところまじらず」(一—一六七頁)、つまり「乱れ」ない人である。葵上の父である左大臣が話をしに来た時も、源氏は「暑きに」と顔をしかめて、女房達に笑われている。ここで暑さは、表面的には源氏が「乱れ」る理由、左大臣の話をうるさがる理由になっているわけである。源氏の心理をつきつめれば、「乱れ」ることのない葵上は窮屈だし、義理の父の話も面白いものではなからう。つまり、左大臣邸が源氏にとって愉快な空間ではないことが伝わってくる。源氏は、くつろいだポーズをしながら、内心、暑苦しさを感じているのであるが、それは、夏という季節のみによるものではないのである。

そうして、暗くなるうちに、大殿は今夜、源氏のやってきた内裏からは方角が悪く、方違えをすべきである、ということになる。方違え先として紀伊守邸が選ばれた理由は、「紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家なん、このごろ水塞き入れて、涼

しき蔭にはべる」(二一六八頁)という供人の一言からであった。さて、紀伊守邸の様子は、次のようである。

水の心ばへなど、さる方にをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、蛩しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。
り。
(二一六九—一七〇頁)

先に、「水塞ぎ入れて、涼しき蔭にはべる」と供人がすすめた邸は、実際、風が涼しかった。方違えのため、源氏は、日中暑苦しかった左大臣邸から、紀伊守邸へ移り、涼しい宵を過ごすことになる。そして彼は、雨夜の品定めを思い出して空蟬に興味を覚え、夜中にこつそり忍んで行くことになる。このように、箝木巻では、夏の暑さに対して「涼し」が使われており、暑さに「乱れ」、義理の父の話をうるさがる源氏が、涼しさを理由に方違えの場所を選び、その場所です空蟬に逢うことになっているのである。

これと同じような例は、宇治十帖の椎本巻にもある。

その年、常よりも暑さを入むぶるに、川面涼しからむはやと思ひ出でて、にはかに参うでたまへり。(椎本・五—二〇七頁)

薫が夏の暑さを逃れるため、宇治の八宮の所へ赴く。薫が西の廂に來たので、姫君達は部屋を移動するが、その様子が薫に伝わってきて、薫は障子の穴から覗く。こちら側に几帳が立ててあつて見えないので、見るのをやめようとしたちようどその時、風が、簾をひどく吹き上げた。そのため、簾の方があらわになるのを心配して、

薫の視界を塞いでいた几帳が、簾の方に移された。薫は心ゆくまで大君たちの様子を見るのできたのである。この、薫が姫君達を垣間見る場面は、箝木巻で源氏が空蟬の声を立ち聞きする場面と類似している。源氏は「この北の障子のあなたに人のけはひするを、こなたやく言ふ人の隠れたる方ならむ、あはれやと、御心とどめて、やをら起きて立ち聞きたま」(二一七三頁)うたのであった。薫の方は昼間、源氏は夜であるが、二人ともこれらの出来事によって、薫は大君に、源氏は空蟬に心惹かれるのである。夏の「暑さ」から逃れるために設けられた、「涼しい場所」において、物語の主人公は恋心を深めることになるわけである。

*

*

この他にも、明石巻では、「いたく更けゆくままに、浜風涼しうて、月も入り方になるままに澄みまさり、静かなるほどに」(二—二三四頁)、明石入道が源氏に身の上話をし、娘の明石上のことを語る。これを受けて源氏は、明石上に関心のある様子を伝えるのである。常夏巻では、「みないと涼しき高欄に、背中押しつつさぶらひたまふ」(三—二六頁)時、源氏が近江君について問いかけ、引き取った内大臣を批判するので「夕つけゆく風いと涼しくて、帰りゆく若き人々は思ひたり」(三—二八頁)という場面があるが、この後、源氏は自分が引き取った玉鬘方へ渡り、懸想心をあらわにする。玉鬘に関しては、「涼しげなり」という語も用いられている。夕顔巻でも、「簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの

透影あまた見えてのぞく」(二一〇九頁)と、源氏が夕顔に関心を
持つきっかけとなる場面に「涼しげなり」が使われている。

さらに、紅葉賀巻では、「夕立して、なごり涼しき宵のまぎれ」
(二一四二頁)に、源内侍との一件が起こっている。滑稽話の場
面にも「涼し」が登場するのである。また、「涼し」が用いられているの
は、夏の季節に限ったことではなく、若紫巻では、晩春、北山で源
氏が若紫を垣間みした後、僧都から「同じ柴の庵なれど、すこし涼し
き水の流れも御覽ぜさせん」(二一八五頁)と誘われ、源氏は若紫
の素性を聞く。これは、水の涼しさを理由に源氏が誘われるという
点が篝火巻と共通している。

それでは、季節が秋の場合はどうだろうか。篝火巻を見てみたい。
秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしき
心地したまふに、忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、
おはしまし暮らし (三一二四八頁)

いと涼しげなる遺水のほとりに、けしきことに広ごり伏したる
檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置きて、さし
退きて点したれば、御前の方は、いと涼しきをかしきほどなる
光に、女の御さま見るにかひあり。(三一二四八〜二四九頁)

これは、源氏が玉鬘方へ渡る場面である。琴を枕に、玉鬘と添い臥
す源氏。こんなに側に寄る事ができて、玉鬘は源氏の手に入らな
い。季節が秋の場合、傍線部ア、イ、ウと、「涼し」が繰り返されて
いるものの、その恋心は実ることのない源氏の片思いに他ならない。

鈴虫巻にも、「風すこし涼しくなりゆく夕暮」に源氏が女三宮方に渡
って「虫の音を聞きたまふやうにて、なほ思ひ離れぬさまを聞こえ
悩ましたまへば」(四一三六八頁)と、宮に未練の想いを打ち明ける
場面がある。が、この時宮はすでに出家してしまっているのである。
以上見てきたように、「涼し」「涼しげなり」は、まず、源氏の恋愛
の契機となる場面に多く用いられている。しかも、夏には叶うこと
が多いが、季節が秋の場合、源氏の恋心は果たされることがない。

二 心境との関連

今度は、場面状況ではなく、登場人物の心境を「涼し」とする例を
見てみよう。

思ふことかつかかなひぬる心地して、涼しう思ひあたるに
(明石・二二三七頁)

これは、明石入道についての文である。先ほど、恋愛に関する「涼
し」の箇所ですべた、明石入道が問わず語り、源氏に身の上や娘に
ついて語った場面の続きに当たる。源氏が、明石入道の娘に逢いた
いという意思表示をしたことを受け、明石入道は自分の思うことが
早くもかなった気がして、「涼しう」思っている、というのである。

また、漣標巻には「ものの報いありぬべく思しけるを、なほし立て
たまひて、御心地涼しくなむ思しける」(二二二六九頁)という例が
ある。これは朱雀院が、故桐壺院の遺言をたがえて源氏を須磨に流
したことで「ものの報い」があるに違いないと思っていたのを、源氏

を都に呼び戻し、元の位につけたので、院の遺言を違えることがなくなり、「御心地涼しく」思っている、というものである。どちらの例も、自分の心の中にあつた思いをかなえたことで「涼しく」思う、というもので、すつきりした清涼感があらわれているといえよう。

若菜下巻には、「その外は、誰も誰も、あらむに従ひて、もろとも身を棄てむも惜しがるまじき齡どもになりたるを、やうやう涼しく思ひはべる」(四—二六〇—二六一頁)という例がある。これは、源氏が、柏木との密通を知った後、女三宮に訓戒する言葉の中に出てくる。出家を願う源氏が「ほだし」、つまり「心ぐるし」と気にかかつていた人々が、もう「ほだし」という状態ではなくなり、出家という源氏の心の中にあつた願いがかなう条件が整ったことを「涼し」といつているわけである。

*

*

ところで、「涼し」「涼しげなり」についての先行論として、中川浩文氏の「源氏物語の『すずし』などについて——その意味の推移と表現における把握——」(京都女子大学『女子大國文』40 昭41・2)がある。中川氏は、

作者紫式部は、風情を作り出すもの、興趣を添えるものの一つに、「涼しさ」を要件として描写する。(略)作者は、殊更らしく「涼しさ」を設定することは殆んどないけれど、一つ一つが、環境作りの条件の、かなり重要な一部として、「すずし」を求めていたことを否定することはできない。

と述べられ、次に恋愛の場面における「涼し」の例を挙げて、

作者紫式部が、源氏の恋の舞台・環境に、また、女性の描写に象徴的な方法をまじえることに、常に配慮を怠らなかつたことを考えると、「すずし」の位置も自ら確認できる重要さを持つたろう。

とまとめておられる。他に、国語学的見地からの、「情意的な意味を原義として、情態的な意味が生まれたということのあり得ない」という指摘など、注目すべき見解が示されている。

ところが、『枕草子』第三五段の「六月十よ日にて、あつきこと世にしらぬ程なり。池のはちすを見やるのみぞ、いと涼しき心地する」の解釈において、

小一条の大将殿の家の結縁の八講の日の叙述なので、「池のはちす……」とあるのは一見宗教的なものに結びつけられそうに見えるかも知れないが、それには無関係に、この時期には、池そのもの、あるいは、池の蓮そのものを涼しげなものと受けとつていたようである。

とされ、『源氏物語』若菜下巻の「池はいと涼しげにて……」のくだりの引用を受けて、

とあるような蓮の有様が、涼しそうにみえる情景の典型と考えてよかるう。枕草子のそれも、宗教的なものへの連想ではなく、まさしく右様の情景に誘発される心情と解すべきものである。と述べられているが、果たしてそうだろうか。次に詳しく見たい。

三 紫上の発心

若菜下巻、六条院女樂の後、紫上は発病し、物の怪によつて一旦息絶える。息を吹き返した後、かねてからの望みである出家を口にする。かつて出家に反対した源氏も、やむなく五戒を受けることを許可する。「忌むことの力」(四一—三三頁)によつて病に効果があれば、との思いからであつた。かくして「ありしよりはすこしよろしきさまなり」(四一—三三頁)と、五戒を受けた功德があらわれる。その後、懐妊した女三宮のもとへ源氏が渡る前に次の場面がある。

女君は、暑くむつかしとて、御髪すまして、すこしさはやかにもてなしたまへり。(略)昨日今日かくものおほえたまふ隙にて、心ことに繕はれたる遺水前栽の、うちつけに心地よげなるを見出だしたまひても、あはれに今まで繕にけるを思ほす。

池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、露きらきらと玉のやうに見えわたるを、「かれ見たまへ。おのれ独りも涼しげなるかな」とのたまふに、起き上りて見出だしたまへるもいとめづらしければ、「かくて見たてまつるこそ夢の心地すれ。いみじく、わが身さへ限りとおほゆるをりをりのありしはや」と、涙を浮けてのたまへば、みづからもあはれに思して、

消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮のつゆのかかるばかりを

とのたまふ。

契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ある露のころへだつ
な (四一—三三五—三三六頁)

傍線部「うちつけに心地よげなる」は、遺水・前栽の様子であるが、紫上の目にそのように見えるのであり、彼女のいくぶんさわやいだ心の内を反映しているといえよう。五戒を受けた後の紫上の心情は、それ以前と明らかに違つてきている。それまでは女三宮降嫁をめぐつて源氏の心変わりを嘆いていた。源氏に向かつては、「かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひ難きを、憎げにも聞こえなきじ」(四一—四七頁)と、彼が拍子抜けする程、物わりのよい態度で受けとめ、かいがいしく準備を整える紫上。人々の予想に反し、平静な振舞を見せている。しかし、それは、彼女が、精一杯自分をなだめ、非を見せないように努力した結果であつた。

とみにもえ渡りたまはぬを、「いとかたはらいたきわざかなと
そそのかしきこえたまへば、なよやかにをかしきほどにえなら
ず匂ひて渡りたまふを、見出だしたまふもいとただにはあらず
かし。(四一—五八頁)

女三宮降嫁の日、源氏がなかなか女三宮方へ向かわないので、紫上が促して源氏を渡らせるこの場面で、源氏を見送る紫上の心中は「いとただにはあらずかし」と推測されている。「ただならず」は、片思い、言い寄る、思い詰めるなどの、恋愛における抑えきれない恋心や、ライバル出現による嫉妬心などのあらわれであり、若菜巻で

の紫上には、女房の評も含め、三例見られる。紫上が初めて「ただならず」という気持ちを抱いたのは、明石上の存在を知った時であり、全体では、八例にのぼる。「ただならず」という気持ちは、光源氏の場合、紫上に三回、明石上と空蟬に二回ずつ、末摘花、齋宮、朝顔、六条御息所、中川の女、玉鬘、秋好中宮、朧月夜、女三宮にそれぞれ一回ずつ抱いている。源氏に対して「ただならず」という思いを抱いた女性は、他に、六条御息所が二回、空蟬が一回である。夕霧は、雲井雁、玉鬘、落葉宮にそれぞれ一回ずつ、夕霧に対しては、藤内侍と雲井雁が一回ずつ抱いた感情となつてゐる。これらを見比べると、他の人物の場合、一人の人物に対して一回のパターンが最も多く、それ以上の例は稀である。紫上の八例は極端な例外であることがわかる。紫上の場合、明石上が初めての強力なライバルであつたことを示している。が、この時は、明石女御を育てることで慰められることになる。若菜巻でも、明石女御の子の世話をするが、そこでは、もはや慰めにはならない。紫上は「ただならず」という感情を表には出していないが、誰にも見せることのなかつた心の中には、源氏への失望とあきらめが渦巻いていたのである。ところが、五戒を受けて詠んだ歌は、源氏への執着から離れている。

先ほどの、池の場面に戻ろう。源氏は、地の文の傍線工「池はいと涼しげにて」に続いて、傍線部オ「おのれ独りも涼しげなるかな」と言つてゐる。このように源氏は「涼しげ」に見えるものを、自分と隔てのあるものとして受けとめてゐるのに対し、紫上は、傍線

部ウ「あはれに今まで経にけるを思ほす」の「あはれ」が、源氏の言葉聞いたときにも、傍線部力「みづからもあはれに思して」と繰り返されてゐるように、目に映る光景を自分の心と一体化させてゐる。

五戒を受け、源氏の愛情に執着することを乗り越えた紫上の心情の変化が「あはれ」とともに、この「涼しげ」に表れてゐると考えられる。

その後、紫上の愛の葛藤は描かれず、彼女はひたすら仏事に関する場面において登場するようになる。密通発覚後、女三宮方へ渡らず、ぐずぐずしてゐる源氏に「心地はよろしくなりにてはべるを、かの宮の悩ましげにおはすらむに、とく渡りたまひにしこそいとほしけれ」（四一―二四六頁）と、女三宮方へ渡りしことを勧める場面を見ても、心の中に思うことはあつても、抑えてそれを言わない、という、かつてのような描写はない。いまや紫上が羨ましがるのは、源氏がかわいがる女性ではなく、朧月夜のように、出家し「かく心にまかせて、行ひをもとどこほりなくしたまふ人々」（四一―二五五頁）なのである。鈴虫巻、御法巻では、

紫の上ぞ、いそぎせさせたまひける。花机の覆ひなどのをかしき目染めもなつかしう、きよらなるにほひ、染めつけられたる心はへ、目馴れぬさまなり。（鈴虫・四一―三六一頁）

女の御おきてにてはいたり深く、仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなどを（御法・四一―四八二頁）

というように、紫上の仏事に関する用意の優れているさまが叙述されてゐる。これらのことや、紫上と源氏の歌に、この世の命や来世

が意識されていることから、先ほどの引用部分における「蓮」には、仏教との関連を読みとることができるのではあるまいか。

紫上は、暑い夏をもちこたえたが、秋の季節に亡くなる。秋の訪れを語る地の文には、「秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては」（御法・四一四八頁）と、「涼し」という語が見られる。

死後、幻巻において、源氏が紫上を回想する場面の中にも、「いと暑きころ、涼しき方にてながめたまふに、池の蓮の盛りなるを見たまふに、「いかに多かる」などまづ思し出でらるるに」（幻巻、四一五二八頁）とあり、紫上が五戒を受けた後、「涼し」「涼しげなり」は彼女をとりまく場面で繰り返し見られる。正式な出家ではなかったにしろ、出家した者の心理に近い、彼女の到達した境地を象徴しているといえよう。しかも、直接紫上の心地を形容するのではなく、地の文や源氏の台詞の中に織り込まれ、それらを通して紫上の到達した心境が読み取れる、という構造になっているのも注目し値する。出家に関する「涼し」は、「ぬるし」と対になっており、その初出は若菜巻である。そのうち、「涼し」は宇治十帖へと引き継がれていく。たくひきこえさせたまふ御心の中は、何ごとも涼しく推しはかれはべれば

（橋姫・五一―三四頁）

世に心とどめたまはねば、出立いそぎをのみ思せば、涼しき道にもおもむきたまひぬべきを

（権本・五一―一六九頁）

いかなる所におはしますらむ。さりとて涼しき方にぞ、と思ひやりたてまつるを

（総角・五一―三〇頁）

宇治十帖では、傍線部アのように、出家した人の心を「涼し」とするものがあるほか、傍線部イ「涼しき道」は、極楽への道を、傍線部ウ「涼しき方」は極楽浄土をさしている。権本巻の例は八宮の言葉の中に、総角巻の例は阿闍梨が八宮について述べている中に出て来ていることをつけ加えておく。いずれにせよ、宇治十帖において「涼し」と宗教的なものとの結びつきは否定し難く明確になっているといわなくてはならない。

中川氏は、これら宇治十帖の例について宗教的な結びつきを認めておられるにもかかわらず、若菜下巻の「涼しげ」に見える池や、蓮に作者のこめた意味を汲み取っておられない。そのためか、「すずし」を重要な語であるとする一方で、「すずしげなり」を、

表現の一部を担当しながら、意外に、属性概念(状態)の表示に止まつて、「すずし」に較べて、表現における位置の、さほどの重みを示さない。

とされている。また、常夏・篝火巻での「涼し」を大きく取り上げながら、同じ場面の「涼しげなり」をあげておられないなど、うなずけない点がある。先に確かめたように、物語の展開に沿ってみれば、「涼しげなり」もまた、「涼し」と同じく、場面を構成する要素として見逃せず、またそれはやはり、宗教性と関わっているのである。

おわり

今回考察した「涼し」系の用語は、主に恋愛と出家の問題に関して

使われている。

「涼し」「涼しげなり」は、一方で、源氏の恋愛の契機となる場面に多く用いられていた。しかも夏と秋とではその成否が異なっていた。

他方、出家とからんだ紫上を取り巻く環境描写に「涼し」「涼しげなり」が出てくる。若菜下巻の当該箇所は、すでに考察したように五戒を受けた後の紫上の心情を象徴するものであると解するべきである。紫上の詠歌には、五戒を受ける前後で変化が見られる。以前は源氏の愛情が他へ移っていくことを嘆いた内容であったものが、五戒を受けた後は、源氏への執着から離れ、彼女自身の述懐となっているのである。また、五戒を受けた後、紫上はもっぱら仏事に關する場面で登場するようになっていくことから、「池はいと涼しげにて」の場面に作者が宗教的な色あいを込めていることは明らかであろう。若菜下巻の該当箇所が五戒を受けた紫上の心情を反映しており、「涼しげなり」もまた、「涼し」と同じく重要な働きを担っていることを改めて付け加えておきたい。付言すれば、二つに分けて取り上げたうちの、場面描写としての「涼し」「涼しげなり」も、より細かく見れば、登場人物の心理を反映したものと捉え得る。たとえば、源氏の恋愛の場面に見られる「涼し」にしても、最初に挙げた帚木卷の例などは、場面状況のみならず、源氏の心理的变化をも象徴しているものとして読むことができよう。背景と心境とが同じく「涼し」という語で統一的に把握されているわけである。

要するに、『源氏物語』における「涼し」「涼しげなり」は、ともに、

単なる「環境作り」を越えて、登場人物の内面の実相や宗教的境地の象徴となり得ている、といえるのである。

〔注〕

(1) 寒暖の感覚を取り上げる動機については、前稿『源氏物語』における「そぞろ寒し」——光源氏の繁榮——(『古代中世国文学』12 平10・11)に述べている。

(2) 若菜卷の、五戒を受ける以前の紫上が源氏に関して詠んだ歌は、次の二首である。

目に近く移ればかはる世の中を行く末遠くたのみけるかな
身に近く秋や来ぬらん見るままに青葉の山もうつろひにけり
いずれも、源氏の愛情が他へ移っていくことを嘆く内容となっている。紫上が詠んだ歌に源氏が返歌をする、というパターンは、明石上と源氏の関係を知った頃からのもので、「ただならず」という心情と並行して表れている。念のためつけ加えておくと、五戒を受けて詠んだ「消えとまる……」の歌より後の紫上の歌は、御法巻における次の三首である。

惜しからぬこの身ながらも限りとて薪尽きなんことの悲しさを
絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを
おくと見るほどぞはかなきとすれば風にみだるる萩の上露
——あいはら・さやか、広島大学大学院博士課程後期在学——